資料紹介

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

加納弘勝著　**第三世界の比較社会論**　東京　有信堂　1996年　196＋vii＋xix p.

著者の加納氏は中東研究者であり，イランやトルコを中心として社会学的な研究を続けてきた。長年のキャリアの集大成は，前著『中東イスラム世界の社会学』（有信堂）にまとめられている。出自としては「地域研究者」の著者であるが，本書では，第三世界全体を視野に入れた比較研究に取り組んでいる。

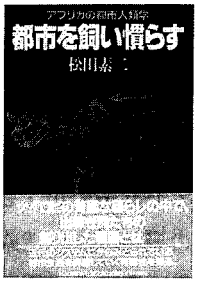
著者は，地域研究を踏まえた上で比較研究を行なうことの重要性を本書で再三強調している。これには全く同感である。「地域のかおり」のない比較研究は無味乾燥だし，比較の視点を持たない地域研究はたこつぼにすぎない。第三世界の社会を比較する際の切り口にも，中東研究者としての出自が感じられ，それが本書の内容を豊かなものにしている。

本書の分析視角は基本的に，「国家と社会」論の枠組みに従っているが，国家や社会の性格や両者の関係を浮き上がらせるために，さまざまな仕掛けが施されている。軍，エスニック集団，宗教といった比較的オーソドックスなものから，都市下層民の住宅，英雄像と聖者像，さらには盗賊に至るまで，多様な観点からアジア，アフリカ，中東，ラテンアメリカの諸社会が論じられている。第三世界の社会学的研究の入門書としても優れている。

最後にアフリカ研究者として一言。本書の「エスニック集団」分析は，評者にはやや物足りなかった。その理由は，著者の「エスニック集団」概念がアフリカ研究の文脈のそれとはかなり異なるからである。本書の「エスニック集団」は「少数民族」に近い概念だが，アフリカでは個々の「エスニック集団」は国家との距離に関しては原則的に同等であり，その意味で「少数民族」とは異なる特質を持っている。アフリカに関して「エスノ比率」を当てはめて論じることには無理があるように思う。

（武内進一）

松田素二著　**都市を飼い慣らす：アフリカの都市人類学**　東京　河出書房新社　1996年　290p.



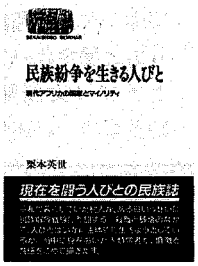
著者は1979年にケニアの首都ナイロビのスラムのひとつであるカンゲミに住みついて，西ケニアのマラゴリからの出稼ぎ民を対象とするフィールドワークを開始した。本書は，それから16年のあいだの調査の成果と思索とを披露したものである。松田氏の軽妙なテンポによって本文にぐんぐん引き入れられ，読後感はさわやかですらある。それは，社会の最底辺を生きる人々を対象としながら，彼らの悲惨な実態を鬱々と訴えるのではなく，彼らの創造性を見いだそうとする松田氏の姿勢が読者に伝わってくるためであろう。

調査対象というよりは友人であるマラゴリ人たちの複雑な思考回路を，松田氏は明快に解き明かしてくれる。例として，「都市の生は仮，村の生は真」というマラゴリ人の語りを紹介しておきたい。この語りから，なるほど都市のアフリカ人は故郷の牧歌的な生活に憧れているのだと，簡単に納得してはいけない。困窮しつつある村は実際には安楽の地ではありえず，マラゴリ人自身も調和的なユートピアなど毛頭信じていないという。彼らの語りは都市生活の困難に対する精神世界の避難所として理想境を創造する象徴実践である。また，彼らは，親族と認知する範囲の拡大，互助をめぐる血縁から地縁への組織原理の転換，あるいは都市での新たな儀礼の発明等によって，都市の現実世界の困難を克服するための生活実践もあわせて行なっている。

彼らの象徴実践と生活実践は，植民地支配によってもたらされたヨーロッパ近代という圧倒的な外部の力にいったんは飲み込まれながら，内部からその仕組みを組み替え，飼い慣らしていくアフリカ出稼ぎ民の抵抗の形態であると，松田氏は高く評価している。

（池野　旬）

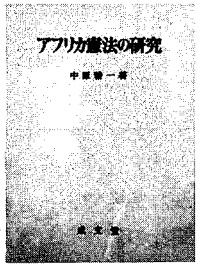
栗本英世　民族紛争を生きる人びと　現代アフリカの国家とマイノリティ　京都　世界思想社　1996年　350p.



本書は，スーダンのパリと，エチオピアのアニュワという，国家の周辺に位置するふたつの民族を取り上げ，それぞれの民族が，紛争にいかに関わり，いかに闘ったかを書き記したものだ。パリは，南部スーダンの解放戦線であるSPLAに参加して政府軍と長期にわたる内戦を続けており，アニュワはメンギスツ社会主義政権に抗して反政府勢力GPLMを組織し，解放をめざして運動してきた。調査で入った村に視点を据えた著者は，紛争が「政府軍対解放戦線」という国家レヴェルでの対立図式に還元されず，ローカル・レヴェルでの民族間関係に裏打ちされた独自の「闘う理由」があることを鋭く指摘する。さらに，個人のレヴェルまで降りてみると，今度は，ローカルな対立図式にさえ回収されない個人の生がある。「民族紛争を生きる」という経験が一律ではなく，人間の数だけ「それぞれの民族紛争」があることを，著者は描き出している。

同時に本書は，自分の目の前にある紛争というものがいかなるリアリティーなのか突き止めるべく苦闘する著者の姿をありありと伝えるドキュメンタリーでもある。「多少は危険な目にあい，紛争の当事者たちとある程度経験を共有したとはいっても，私はしょせん部外者であった」(14ページ)と著者は言う。現地で親交を深めた友人たちが，解放闘争に参加し，時には命を落とす。友人としての共感から紛争の意味を知りたいと思う。だが，身近な経験のはずなのに，実はあまりにも遠い。題名のとおり，民族紛争を生きるのは「人びと」，つまり他者である。いかにしてこの苦い認識を超えられるのか。紛争で命を落とした友人たちへの個人的な思いを記した終章にその鍵があるように思う。「特殊なものに徹底することで人は普遍に到達し，最大限の主観性を通じて人は客観性に達する」(レリス『幻のアフリカ』220ページ)。この一節をもって著者の試みへの賛辞としたい。　(佐藤　章)

中原精一著　アフリカ憲法の研究　成文堂　1996年　379p.



本書は，著者の25年にわたるアフリカ法研究の集大成ともいうべきものである。

アフリカにおいて，法律は時として有名無実のもの，空文と思われがちだが，本書は，法，特に憲法はそのような存在ではなく，政治の現状を反映した存在として，アフリカ諸国が抱える問題とともに変遷していくものであることを，各国の憲法を詳細に検討しながら，示してくれている。

この本の構成は，次のようになっている。第1部の「アフリカ憲法研究総論」では，アフリカの社会環境，アフリカにおける憲法と政治の問題点が語られている。第2部では，「アフリカ諸国憲法成立と発展」として，植民地の歴史を踏まえて，英語圏，仏語圏，ポルトガル語圏，南部アフリカ諸国それぞれの特徴が分析してあり，具体例としてケニア，セネガル，コート・ジボワール，ギニア・ビサウ，モザンビーク，ザンビア，ジンバブウェ，ナミビア，南アフリカ共和国が扱われている。第3部の「アフリカ法の研究」では，切り口を変えて，宗教，社会福祉，都市問題の観点から，法制度を分析している。

事実上の制度と思われがちな一党独裁制も，多くの国が憲法上の制度にしていることなど(48〜49ページ)，法と国家の関係について新たな視点を提示している。

ただ一つ残念なのは，アフリカ法の特徴としてエスニック・グループの存在を挙げていながら，その対立を防ぐために各国がどのような選択を行なったかについては，基本的には慣習法についての言及にとどまり，結社の自由などにおける分析がなかったことである。

1973年から94年の間に発表された論文から構成されており，若干統一性に欠けるきらいがあるが，アフリカの法体系を学ぶに当たっては，たいへん有用であるといえよう。　(児玉由佳)

松本仁一著　**アフリカを食べる**　東京　朝日新聞社　1996年　238p.

「アフリカを食べる」とは凝った書名である。著者は朝日新聞社の記者として長年アフリカに滞在している。本書は『朝日新聞』の土曜日夕刊に1994年4月から95年6月まで連載されたコラムをもとに編集されたものである。

著者は「アフリカの食物についての専門的解説書ではありません」と「あとがき」に述べているが，本書は立派に地域研究の成果として評価されうるものではないだろうか。

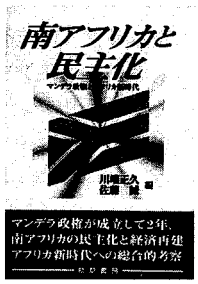
「食」という人間が生きる上で欠くことのできない営みを集中的に取り扱うことでみごとにアフリカに住む多彩な人々，生活，思考方法を描いている。それをうまく表現できたのは著者の生来の食いしん坊，幼いころからの食体験，そして人への尽きぬ興味である。ちょっと危ないな（運が悪ければ何かの病気になる）と思っても現地の人がおいしそうに食べているのを見ているうちにエイヤッと食べてしまう。すると，……おいしいのである。おまけに酒も好きである。

こうした経験の中からその地域の人がなぜ，どのような歴史の中で，その食物を食べるようになったかの必然性へも思いを馳せていく。一般に複雑な食文化が発達しないといわれるブラックアフリカの中で西アフリカのある地域に“フーフー”といわれる手の込んだ餅のような食物がある。何故か？かつて王国が存在していたからだという。今は貧しくても人々は古王国の文化を伝えているのである。

食物というものはその地域の気候，自然，文化のもとで食べてこそおいしいのである。そこに住む人々が自分たちと特別違いのある「人種」だからというわけではないのである。

（鈴木陽子）

川端正久・佐藤誠編　**南アフリカと民主化—マンデラ政権とアフリカ新時代—**　東京　勁草書房　1996年　272p.



南アフリカ共和国（以下，南ア）のアパルトヘイト体制が崩れ，1994年5月にマンデラを主班とする国民統合政府（GNU）が発足して早くも2年が経過した。この間，国際社会は南アの民主化を歓迎し，その行方を注視してきた。編者を中心とする関西在住の南部アフリカ研究者（および南アの共同研究者）たちは，数年前から南アの民主化と日本との関係の変化に注目し，これまで『南部アフリカ——ポスト・アパルトヘイト——』(1992年)，『新生南アフリカと日本』（1994年）を共同研究の成果として上梓してきた。本書はその延長上にマンデラ政権登場後の諸課題をあつかった総合的研究である。研究の課題として国民融和，政治の民主化，経済の再建，国際社会への復帰，南アと日本の関係をあげ，本書は第Ⅰ部 国民統一政府の課題，第Ⅱ部 南部アフリカの新時代，第Ⅲ部 南アフリカ・日本関係の新展開の3部10論文および南ア現代史年表から構成されている。上記課題と構成から明らかなように本書は南ア民主化後の重要課題を網羅しており総合的研究の名にふさわしい。第Ⅰ部ではアパルトヘイト体制の崩壊過程とGNUの課題を追い，RDPの厳密な読みと批判に基づきRDPを分析し，現地に即した視点から社会変化を視，南ア経済の主柱としての鉱業を展望し，今後の開発におけるNGOの役割を分析している。第Ⅱ部では南ア民主化の周辺諸国に及ぼす影響を95年のSADC会議，地域安全保障，南アへの人口移動（集中）の3側面で分析している。第Ⅲ部は日本・南ア関係を経済関係と日本の対南ア政策を新聞報道と外交青書を丹念に追い分析している。

本書の刊行と前後して南アでは新憲法が採択され，その直後に国民党がGNUから離脱し，マンデラ政権は大きな転機にさしかかった。本書は南ア民主化後の2年間を総括したという意味できわめて意義深い。

（林　晃史）